

# 室戸岬・御厨人窟の波音

高知県室戸市



断崖にぽっかりあいた2つの洞窟。右が神明窟、左が御厨人窟。

774(宝亀5)年、讃岐国多度郡屏風ヶ浦(現在の香川県善通寺市)の豪族・佐伯宣田公の三男として真魚が生まれた。佐伯氏も母方の阿刀氏も学者の系統だったため、多くの学問に囲まれて育った真魚は、15歳で都に上り、18歳で大学に入った。しかし、大学での勉強には満足できず、19歳を過ぎたころから修行の旅に出た。その途中、ある修行僧からすべての経文を暗記できるという「虚空蔵菩薩求聞持法」を授かり、故郷の四国でその修行に励んだ。そのとき巡ったのが、阿波(徳島)の大滝岳や伊予(愛媛)の石槌山、そして室戸岬などである。

室戸岬の東側、国道55号線に面した断崖に2つの口がいている。ここが真魚が室戸における修行の地として選んだ洞窟だ。修行に使ったのが右の神明窟。もう一方が寝泊まりをした、いわば生活の場だった御厨人窟である。

目の前には太平洋が広がる。波が激しく岩礁に当たり、砕ける音が響いている。近くに住む女性は「台風のと



室戸岬に打ち寄せる波は荒い。岩礁に当たって散るときは音は地響きのような。



御厨人窟に入ってすぐのところでは修行僧が経を唱えていた。奥には五社神社と呼ばれる社があり、意外に広い。

神明窟に向かうお遍路さん。洞窟の中らしみ出た水が、国道まで筋をつくっていた。このあと、最御崎寺を目指すと言って去って行った。

は波の飛沫が崖に当たり、岩がはがれて落ちることもあるんですよ」と話す。

神明窟は奥行き10mほどだが、御厨人窟は40mくらい行かないと壁に行き着かない。しかもその壁面にはとても細かい隙間があり、もっと奥まで続いているようだ。「ここは戦中は防空壕でした。食べ物を頭の上のせて海を泳いで洞窟まで逃げてきたようです。そのとき子供だった70歳のおじいさんは、御厨人窟の奥の隙間から中に入っていたとき、戻れなくなると言うくらい



室戸岬の海岸を歩くお遍路さん。海岸沿いには乱礁遊歩道が設けられ、空海が修行中に行水したといわれる「行水池」や、眼病を治療したとされる「目洗の池」など、空海ゆかりの場所が多くある。

御厨人窟の中から入口を振り返る。国道の向こうに見えるのは空と海だけ、聞こえるのは波音だけである。

飛び込んできた。793年のことである。その瞬間、真魚は求聞持法を会得。そのとき得た悟りを797年に『三教指帰』として完成させた。

御厨人窟の中から外を振り返ると、国道の向こうに空と海が見える。いまから1200年前は洞窟の入口あたりが波打ち際だったという。当時は道もなく、洞窟から見える外の風景は空と海だけだった。そしてその景色が、求聞持法の会得後の真魚には、以前とまったく違って輝いて見えたという。それまで如空、教海などと法号を変えていた真魚は、その光景から名を改めた。すなわち「空海」である。



現在は天照大神が祀られている神明窟。この中からは空と海は目にできない。



四国八十八ヶ所第24番礼所の最御崎寺へ至る石段(上)と寺の境内(下)。下の写真の奥に見えるのが本堂。徳島から高知に入って最初の礼所である。

空海が四国で修行を続けた険しい山は、そのまま「四国八十八ヶ所」となった。御厨人窟にもお遍路さんがひっきりなしに立ち寄りていく。このあとに目指すのは第24番礼所の最御崎寺だ。お遍路さんの砂利を踏む音がなくなると、耳に入るのはまた波音だけになった。

よく聞こえる時期  
1年中聞くことができる。とくに波の高いときはよく聞こえる。

問い合わせ先  
室戸市観光深層水課 電話0887(22)5134

参考文献：環境省大気保全局大気生活環境室発行『残したい日本の音風景100選』JVCプレット